

# 群書類従懷風藻の後代竄入詩

——亡名氏「歎老詩」考——

土佐 朋子

- 一、はじめに―五言一句の謎―
- 二、屋代弘賢校本（屋代校本）と群書類従懷風藻の関係
- 三、亡名氏「歎老詩」の創作時期
- 四、第四句欠落の通説化
- 五、亡名氏「歎老詩」の本来の形―五言一〇句と異文注記一句―
- 六、「孝翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年」の解釈
- 七、「伶俚須自怜」への改訂と第五句目以降の増補―寒山詩的世界の創出―
- 八、おわりに―「笑拈梅花坐」成立の謎―

亡名氏「歎老詩」は、天和版本の欠字を恣意的に補つて元禄一七年に書写された「白雲書庫本懷風藻」において書き加えられた詩である。創作時期は天和四年以降元禄一七年の間と推定される。それが屋代校本の書入を介して、群書類従において弘賢が恣意的に変形した五言一句のまま本文に立てられた。本来の形は、五言一〇句とその第二句「春日不須消」に対する異文「伶俚須自怜」一句である。創作過程は二段階に分かれる。第一段階では、「春日不須消」を第二句に置き、梅を拈る自分に「少年」を見て喜ぶ老人を描く四句が創作された。第二段階において、第二句が「伶俚須自怜」に変えられ、第五句目以降の後半六句が増補され、それらには江戸初期に流行を見せた寒山詩の表現が取り込まれ、漢詩の伝統的な主題「歎老」を寒山詩風に描く世界に創り変えられた。

## 一、はじめに―五言一句の謎―

『懷風藻』には、現存が確認されている写本三五本のほか、天和四年刊、宝永二年刊、寛政五年刊の各版本、および群書類従巻八「文筆部」所収本文が存在する。<sup>①</sup>このうち、群書類従のみが本文に採用する異伝の詩が三首あり、本稿で採り上げる「亡名氏」の「五言歎老詩」は、その中の一首である。

群書類従本文の最後に収録されるこの亡名氏「歎老詩」については、早くから、群書類従にしか掲載されないことの不審や、懷風藻詩の表現とは異質な要素が見られることの問題点が指摘され、後世の加筆ではないかと疑われてきた。<sup>②</sup>懷風藻序や目録との整合性という観点からも、不審に思われる点がある。「亡名氏」を加えると「懷風藻」に収録された詩人は六五人になるが、それは「作者六十四人、具に姓名を題し、并せて爵里を顕はし、篇首に冠らしむ」とする懷風藻序の説明と齟齬を来す。また、群書類従懷風藻の目録が、他の懷風藻諸本と同様に「葛井広成」で終わっており、自らが本文に掲載する亡名氏を記載していないことにも不整合な感じを受ける。

さらに、群書類従が「歎老詩」の本文を五言一句という不完全な形で収録していることも不審である。そのため、

従来の注釈書類では、もともと五言二句だったはずだと考え、第四句目が欠落していると想像し、詩の前半を、

牽翁双鬢霜 伶俜自須伶 春日不須消 □□□□□  
笑拈梅花坐 戲嬉似少年 ……

という形で掲げるのが一般的であった。

しかし、この想定は、群書類従が掲載する五言一句という形を疑うことなく受け入れ、それを前提として案出されたものである。五言一句という漢詩としては中途半端な形のままで収録されていることの意味が、全く検証されてこなかったところに問題がある。

本稿では、亡名氏「歎老詩」が、五言一句の形で群書類従懷風藻にのみ収録されるに至る過程をたどることから始め、いつ頃、どのような形で、どのような意図と経緯をもって創作されたのかを明らかにすることを試みたい。

## 二、屋代弘賢校本（屋代校本）と群書類従懷風藻の関係

亡名氏「歎老詩」は、道融の「山中詩」および無題詩異文とともに、現存伝本のうち群書類従所収の懷風藻にしか掲載されていない特異な本文である。そのため、懷風藻本

文の系統について、これらの本文の有無によって「群書類従本系」と「その他の系統本」に分ける考え方が行われてきた。

しかし、群書類従懷風藻の本文は、複数の本文によって編集されて生み出された新しい複合本文である。特定の系統に属する本文を忠実に受け継ぐものではない。巻末の識語に「屋代弘賢蔵本」と「奈佐勝臯蔵本」によって校合されたことが記されている。このうち「奈佐勝臯蔵本」は未発見のままであるが、「屋代弘賢蔵本」は昭和六十一年に足立尚計氏<sup>⑤</sup>によって発見された。

「屋代弘賢蔵本」（川越市立図書館蔵不忍文庫旧蔵）は、屋代弘賢による懷風藻校本である（以下、「屋代校本」。広橋本系統の本文に対して、巻末の識語に記された三本の対校本、「天和三年東武細縮読書本」（塩竈本）、「山重頭校本」（天和四年版本）、「白雲書庫本」のほか、複数の対校本を用いて校合書入を施している。

屋代校本の書入には、異同が書き取られていない箇所や、親本の本文が特定の対校本の文字に書き替えられている箇所などが多く確認され、弘賢自身の判断による取捨選択が行われた形跡が見て取れる。その判断は、弘賢自身の主観に基づいており、近代以降に成立する文献学的常識に基づくものではない。そのため、今改めて検証すると、弘賢の

書入には、正統なものとは考えたい本文が採用されている箇所も少なからず確認される。

しかし決して弘賢が不見識だったわけではない。江戸中期における弘賢の本文考証を、池田亀鑑以降に確立する近代的文献学の常識をあてはめて評価すべきではないだろう。考証家である弘賢は、懷風藻本文の来歴を明らかにするために、できるだけ多くの情報を収集し、比較対照しているのである。その手法は、特定の本文を忠実に継承しようとする書写や、林家のように漢詩文として適切な表現に改変する享受とは異なる。多くの情報を比較対照させて「科学的」に古物の来歴を明らかにしようとする考証学の発想に基づいた、当時としては最新の本文考証だったと言える。ただ、比較対照の結果、本文としての適切さを判断する基準は、いわゆる文献学的な尺度ではなく、弘賢自身の教養に委ねられていたということである。

群書類従は懷風藻を収録するにあたって、この屋代校本を、考証家弘賢による最先端の「科学的」本文考証の成果として高く評価し、積極的に活用したと想像される。事実、群書類従の懷風藻本文と屋代校本を比較してみると、群書類従が屋代校本の書入をほぼ全面的に取り込んでいることが分かる。弘賢が本文を改訂した箇所はその通りに改訂し、弘賢が「衍字力」と傍記すればそれに従って削除し、補入

蓋し先民の作なり。時に元禄十七年春正月書

した箇所はその補入された文字をそのまま本文に採用するなど、弘賢の書入に基づいて本文が編集されている。その結果、群書類従において、弘賢によって屋代校本に書き入れられた複数の本文が、弘賢が示した判断に従ってほぼすべて合体され、新しい懷風藻の複合本文が生み出されることになったのである。

### 三、亡名氏「歎老詩」の創作時期

亡名氏「歎老詩」も、屋代校本の書入にすぎなかったものが、群書類従において懷風藻の正文に採用された例の一つである。屋代校本には、対校本とした三本のうち、「白雲書庫本」の跋題が次のように書き取られている。

白雲書庫本跋題云、或人齋西三條実隆公定本示予其書  
浄潔真絶也書中闕字衍文皆弥縫只藤原万里詩僅闕一二  
字道融詩載二首別有一首其姓字無亦是非後人之言蓋先  
民之作于時元禄十七年春正月書

（白雲書庫本跋題に云ふ、或る人が、西三條実隆公定本を齎して予に示せり。其の書、浄潔にして真絶たり。書中の闕字・衍文、皆弥縫せり。只だ藤原万里詩、僅かに一二字を闕するのみ。道融詩に二首を載せ、別に一首有り、其の姓字無し。亦た是れ後人の言に非ず、

「白雲書庫本懷風藻」は現存が確認されていないが、屋代校本のほか、養月齋本（東京大学附属総合図書館蔵伊勢貞丈旧蔵）と佐々木長卿書入天和版本（西尾市立西尾図書館岩瀬文庫蔵）にも、右の跋題が書き取られている。この跋題は、「白雲書庫本懷風藻」の本文は、脱落がほとんどなく、諸本にはない三首を持っており、三條西実隆（「西三條実隆」が「定本」としたものだ）と主張している。「姓字無」しの「一首」が、亡名氏「歎老詩」にあたる。この跋題の主張を鵜呑みにするなら、亡名氏「歎老詩」は、古典研究の大家である三條西実隆が認めた、由緒正しき本文だということになる。

しかしながら、跋題とともに本文の一部を書き取っている屋代校本、養月齋本、佐々木長卿書入本に基づいて「白雲書庫本懷風藻」の本文を復元してみると、天和四年版本の墨格にあたる箇所のみ限定的に、ほかの懷風藻諸本の文字とはかけ離れた特異な文字が現れるという現象が確認できる。懷風藻の現存諸本はすべて祖本を同じくすると見られ、本文の異同はおおよそ判読の相違や誤写の範疇に収まる。中には林家系統本のように、詩句を意図的に独自に改変（意改）した結果、その範疇を逸脱する異同が生じて

いる場合もあるが、それらは当然のことながら、天和版本の墨格とは関係なく現れる。天和版本の墨格の箇所にも、規則的に現存諸本の異同の範疇に収まらない文字が現れるという「白雲書庫本懷風藻」の特異な現象を合理的に説明するためには、「白雲書庫本懷風藻」の本文は、二〇箇所を超える墨格を残したまま刊行された天和四年版本を見たある人物（X氏）が、その闕字箇所<sup>⑧</sup>に独自に文字を補って「創作」したものだと考えざるを得ない。

「白雲書庫本懷風藻」は、三條西実隆本に由来するどころか、天和四年版本刊行後に生み出された新しい本文である可能性が極めて高い。跋題末尾の「元禄十七年正月春書」から、「白雲書庫本懷風藻」が元禄一七年（一七〇四）に書写されたことが分かるが、これは白雲書庫の主である野間三竹が死没した延宝四年（一六七四）から三〇年後である。三竹は『本朝詩英』編纂時に「懷風藻」を用いた形跡が見られることから、「懷風藻」を所蔵していたことは確かだと思われる。<sup>⑨</sup>しかし、この跋題を有する「白雲書庫本懷風藻」は明らかに三竹が所蔵した懷風藻ではない。主人亡き後に、天和版本の墨格に文字を補って生み出された新しい懷風藻である。

「西三條実隆公定本」なる懷風藻伝本もまた現存せず、懷風藻諸本はもちろん、書入その他の懷風藻に関連する資

料においても、全くその痕跡を確認することはできない。本当に実在したのかさえ頗る疑わしく思われる。「白雲書庫本懷風藻」の本文を「創作」したX氏が、新しく創作した懷風藻本文の「新しさ」を糊塗し、正統性を装うべく「西三條実隆」という古典研究の権威の名を持ち出したのではないだろうか。

「白雲書庫本懷風藻」のこのような性格を見ると、亡名氏「歎老詩」もまた、X氏が天和版本の墨格を補うと同時に、独自に書き加えたものである可能性が極めて高いと思われる。X氏の意図がどこにあったのか、確言することはできない。ほんの遊び心、腕試しという可能性も大いに考えられる。ただ、懷風藻はその序文に詩数を「一百二十篇」としているが、一一六篇しか収録されていない。X氏は、それを不完全な状態だと感じ、自ら詩を補充して一二〇篇の完全な形にしようとしたのだろうか。三首補うだけでは一一九首でまだ一首不足するが、諦めたのか、あるいは詩の数え方によって一二〇首にしたつもりになっていたのだろうか。例えば麻田陽春詩は、詩人名の下には「一首」と記すが、詩題の下に「一首」の記載はなく、換韻される前半と後半を分けて記載するため、一見すると二首に数えられかねない。その辺りの具体的な事情は不明であるが、亡名氏「歎老詩」が道融詩二首とともに、X氏による

「白雲書庫本懷風藻」の本文創作時に書き加えられたものである蓋然性は極めて高い。

その創作時期は、天和四年（一六八四）版本刊行以降、跋題に記された書写年月「元禄十七年春」（一七〇四）までの間と推考される。山岸徳平氏<sup>⑩</sup>が主張する「中世期」をさらに引き下げることになるが、もし、中世期までにこの詩を書き付けた伝本が一本でも存在していたのであれば、「白雲書庫本懷風藻」およびそれを参看したと思しき三本以外の現存伝本・書入本に、この詩が全く触れられることもなければ、閲覧・伝録された形跡もないというのは、あまりにも不自然なことではないだろうか。そして、この三首が「後人の言」ではなく「先民の作」だとする跋題のわざとらしく強引な主張には、逆に、「白雲書庫本懷風藻」の本文の「新しさ」を覆い隠したいX氏自身の欲望が露呈しているように思われるのである。

#### 四、第四句欠落の通説化

群書類従懷風藻では、亡名氏「歎老詩」は次のような五言一句の形で収録されている。

牽翁双鬢霜 伶俖須自伶 春日不須消 笑拈梅花坐  
戲嬉似少年 山水元無主 死生亦有天 心為錦綯美

自要布裘纏 城隍雖阻絶 寒月照無辺

江戸期の詞華集『日本詩紀』では、天明六年（一七八六）の刊記を持つ木活字版には当該詩は収録されていない。後に改訂して刊行された浄書本では巻六に、作者を「失名氏」とし、群書類従収録の本文の第四句目にあたる箇所「□□□□」の五文字分の空欄を入れ、次のような五言一二句の形にして収録されている。

牽翁双鬢霜 伶俖須自伶 春日不須消 □□□□□  
笑拈梅花坐 戲嬉似少年 山水元無主 死生亦有天  
心為錦綯美 自要布裘纏 城隍雖阻絶 寒月照無辺

市河寛斎は、当該詩を『日本詩紀』浄書本に収録するにあたって、群書類従懷風藻に掲載された五言一句では、漢詩としては不完全であることに気づき、押韻の関係から第四句が欠落していると推定したのだろう。

元治二年（一八六五）成立の鈴木真年『懷風藻箋註』<sup>⑪</sup>では、特に欠落句の想定はされていない。宝永版本を底本とする大正一五年刊『日本古典全集』、昭和二年刊『校註日本文学大系』でも、五言一句のまま群書類従懷風藻の本文の通りに引用されている。



昭和六年刊『新校群書類従』（第六巻）の久保得二氏による解題では、『日本詩紀』への言及は特にないが、『日本詩紀』浄書本と同じ形で引用され、第四句が欠落しているという見解がはつきりと示されている。その後も、昭和八年の澤田總清『懷風藻註釈』が第三句の下に「恐らくは一句脱してゐるであらう」と注し、昭和九年に吉田幸一氏が「誰しもその第四句が脱落してゐることに気がつくであらう」と論じ、昭和二十一年に岡田正之氏がやはり第三句に「此下恐脱一句」と記している。世良亮一『懷風藻詳釈』、杉本行夫『懷風藻』、小島大系、辰巳正明『懷風藻全注釈』といった注釈書類もすべて第四句に欠落があるとする見解を示している。

このように、当該詩が第四句に欠落句を持つ本来は五言一二句の詩だとする想定は、群書類従懷風藻に収録される五言一句という漢詩の型式としての不完全性を解消するために編み出された。そして、その想定は、検証し直されることなく、無批判に通説化されてきたと言える。

## 五、亡名氏「歎老詩」の本来の形―五言一〇句と異文注記一句―

当該詩を第四句に脱落を持つ五言一二句だとする従来の考え方は、群書類従懷風藻が収録した当該詩の本文に信頼

性があることを前提として、初めて成立する。しかし、そもそも群書類従はなぜ五言一句という不完全な形で収録しているのだろうか。その本文が信頼するに足るものなのかどうかを検証する必要がある。

群書類従懷風藻の当該詩の本文は、屋代校本の書入と全く同一である。群書類従懷風藻が、弘賢の書入をそのまま本文として立てていることは明らかである。もともと「白雲書庫本懷風藻」にあった当該詩を、弘賢が自らの校本に書き入れ、それが群書類従懷風藻において正文として本文に組み込まれた。単純に考えると、弘賢が五言一句で書き取っているからには、「白雲書庫本懷風藻」にも五言一句の詩として掲載されていたことになる。

しかし、「白雲書庫本懷風藻」から本詩を書き取った屋代校本、養月齋本、佐々木長卿書入天和版本の三本を比較すると、屋代校本のみ他の二本とは異なることが確認される。

### 【屋代校本】

亡名氏

五言歎老

羣翁双鬢霜 伶俚須自怜 春日不須消 笑拈梅花坐  
戲嬉似少年 山水元無主 死生亦有天 心為錦綢美

自<sub>レ</sub>要布裘纏 城隍雖阻絶 寒月照無辺

【養月齋本】

亡名氏歎老五言 ○伶俚須自怜<sub>イ</sub>

耄翁双鬢霜 ○春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年

山水元無主 死生亦有天 心為錦綢美 身<sub>レ</sub>要布裘纏

城隍雖阻絶 寒月照無辺

【佐々木長卿書入天和版本】

亡名氏歎老五言 伶俚須自怜<sub>イ</sub>

耄翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年

山水元無主 死生亦有天 心為錦綢美 身<sub>レ</sub>要布裘纏

城隍雖阻絶 寒月照無辺

屋代校本と他の二本との相違点は主に三点確認される。

一点目は、屋代校本が第三句に据える「春日不須消」が、他の二本では第二句に据えられ、屋代校本が第二句に据える「伶俚須自怜」が、他の二本では末尾に「イ」の符号が付され、詩題の下に記されている点である。二点目は、屋代校本では「自<sub>レ</sub>要布裘纏」とある箇所が、他の二本では「身<sub>レ</sub>要布裘纏」とされる点である。三点目は、屋代校本では「五言歎老」と記される詩題が、他の二本では「歎老五言」

言<sub>レ</sub>」の形で付されている点である。

いずれの点においても、養月齋本と佐々木長卿書入本との間に共通性が高く、屋代校本だけが異なっている。屋代校本よりも、養月齋本と佐々木長卿書入本に書き取られた形の方が、「白雲書庫本懷風藻」の本文を忠実に伝えている可能性が高いと考えるのが自然だろう。

養月齋本と佐々木長卿書入本に書き取られた「伶俚須自怜<sub>イ</sub>」の「イ」は、言うまでもなく異文注記であることを示す符号である。脱落句とその補入を示す符号ではない。さらに、養月齋本には「伶俚須自怜<sub>イ</sub>」の左上と、第二句「春日不須消」の右上に、小さく○が付されている。佐々木長卿書入本には書き取られていないが、養月齋本が勝手に○を付したとは考えにくいので、佐々木長卿が書き落とした可能性が高いだろう。この二つの○は、「伶俚須自怜<sub>イ</sub>」が第二句「春日不須消」の異文であることを示す符号であると考えられる。

しかし屋代弘賢は、二つの○を見て、「伶俚須自怜」が「春日不須消」の上に補入されるべき句であることを示す符号だと考えたのだろう。だから、「伶俚須自怜」を「春日不須消」の上の第二句目に据えた。しかし、そのような場合、○は「春日不須消」の右上ではなく、「耄翁双鬢霜」○「春日不須消」のように、第一句と第二句の間に○を打つ



て補入箇所が示されるのが一般的であろう。また、「須」が第二句と第三句に連続して用いられることになり、漢詩の構成としてはやや不自然になる。「須」という同一文字を含むことから、弘賢が考えたような連続する二句ではなく、「伶俖須自伶」が「春日不須消」の異文として作られた蓋然性が高い。おそらくは、創作者による推敲の跡ではないかと思われる。

「白雲書庫本懷風藻」では、五言一〇句の詩とその第二句目に対する異文注記として記載されていたはずのものが、弘賢の判断によって、異文注記が詩の第二句に本文として取り込まれ、五言一句に変形されて屋代校本に書き入れられた。群書類従懷風藻は、その書入を信用して正文として取り込んだために、五言一句という異様な形で収録することになったのである。

二点目の「身」と「自」の相違、および三点目の詩題の形の相違についても、同じことが言える。養月齋本と佐々木長卿書入本の二本が「身要布裘纏」と書き取っているのであるから、「白雲書庫本懷風藻」は「身要布裘纏」であったと考えるべきであろう。第七句「心為錦綢美」との対句構成を考えても、「自」より「身」の方がふさわしい。屋代校本の「自要布裘纏」は、誤写あるいは弘賢自身の判断による改変であろう。また、詩題の形は、養月齋本と

佐々木長卿書入本の二本が「歎老五言」と書き取っているのであるから、「白雲書庫本懷風藻」には「歎老五言」とされていたと考えられる。屋代校本の「五言歎老」は、懷風藻の詩題の記載形式にあわせて整えられたものだろう。

弘賢の書入には、「白雲書庫本懷風藻」の忠実な再現ではなく、弘賢自身の判断に基づいて整序・編輯された形が示されていると言える。その屋代校本の書入が、そのまま正文として採用されたのが群書類従懷風藻所収の亡名氏「歎老詩」である。「伶俖須自伶」を第二句に据え、「自要布裘纏」の本文を採る、この群書類従懷風藻所収の五言一句の本文には、弘賢の恣意的な判断による編集が加えられていることになり、適切な本文とは言い難い。そうであるからには、この群書類従懷風藻所収の本文を土台として案出された、第四句が脱落した五言一二句の詩として把握する従来の考え方もまた、適切なものとは言い難い。本詩は、「白雲書庫本懷風藻」に記されていたと推定される本来の形に基づいて、改めて考察し直される必要がある。

#### 亡名氏歎老五言 ○伶俖須自伶

牽翁双鬢霜 ○春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年  
山水元無主 死生亦有天 心為錦綢美 身要布裘纏  
城隍雖阻絕 寒月照無辺

これが亡名氏「歎老詩」のもともとの形である。「春日不須消」を第二句に持ち、第八句を「身要布裘纏」とする五言一〇句の作品である。「伶俖須自怜」は「春日不須消」の異文として作られた句と推考される。

この形ならば、欠落句を想定する必要はない。また、「耄翁双鬢霜 伶俖須自怜 春日不須消 □□□□□ 笑拈梅花坐 戲嬉似少年…」としていた従来の方だと、欠落句を伴って第三・四句に置かれることになる「春日不須消」の解釈に難が生じていたが、それも解消されるように思われる。

## 六、「耄翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年」の解釈

「A 耄翁双鬢霜 伶俖須自怜 春日不須消 □□□□□

B 笑拈梅花坐 戲嬉似少年…」とされた従来本文では、

「春日不須消」を、例えば小島大系の「春の日を他人のように浮かれ廻つて過ぐす必要もない」という具合に解してきた。しかしこれは、老に對する嘆きの表現と解されるA第一・二句「耄翁双鬢霜 伶俖須自怜」と、梅花とたわむれる「少年」のような姿を描くB第五・六句「笑拈梅花坐 戲嬉似少年」をつなぐ転句のような働きを持つ句として読むために、やや強引に案出された解釈であるよう

に思われる。

確かに、「消」は例えば、「登高墉以永望 冀銷日以忘憂（高墉に登りて以て永望し 冀はくは日を銷じて以て憂いを忘れん）」（曹植「感節賦」『藝文類聚』卷二八「人部・遊覽」）のように「日」を伴って、その日を過ぐす意を表し、「風物自応隨律轉 霜髯爭得見春消（風物自づから応じて律に隨ひて轉じ 霜髯爭得か春の消ゆるを見るを得ん）」（明・劉基「寒夜」『誠意伯文集』卷六）のように「春」を主体に立てて、春が過ぎ去ることを表すなど、時間の経過や消耗を表す働きがある。しかし、冒頭Aで白髪の老いの孤独を嘆き、次に春の日を徒らに過ぐす必要はないと言ひ、続くBで笑いながら梅を拈つて坐す戲嬉たる姿は少年のようだと主張するという従来解釈は、各聯のつながりが分かりにくくはないだろうか。かなり補足的な説明が必要となる不自然な詩句構成であると思われる。

それに対して、「耄翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年…」は、「春日不須消」が第一句「耄翁双鬢霜」を直接受けることにより、「耄翁」の「双鬢霜」は「春の日になったからといって、必ずしも消える必要はない」という具合に、自然につながっていく。

白髪を譬喩する霜や雪が、春になつても消えないという表現は、例えば中唐・白居易「早春」（『白氏文集』）卷一

四)の「雪散因和氣 冰開得暖光 春銷不得處 唯有鬢邊霜(雪散ずるは和氣に因り 冰開くるは暖光を得るためなり 春銷えて得ざる處 唯だ鬢邊の霜の有るのみ)」、宋・陸游「雨夜」(『劍南詩稿』卷五〇)の「最憐鬢畔千莖雪 日日春風吹不消(最も憐れむ鬢畔千莖の雪 日日春風吹けども消えざるを)」、宋・許及之「次韻才叔初春絕句 其二」(『涉齋集』卷一五)の「旧日春風応笑我 鬢邊殘雪沒消時(旧日の春風に我を笑ふべし 鬢邊の殘雪消ゆる時沒し)」、宋・李世民「戲和叔」(『大隱集』卷九)の「春風不消兩鬢雪 酒力尚借雙頰紅(春風は消さず兩鬢の雪 酒力は尚ほ借る雙頰の紅)」など、漢籍に散見され、類型化されていたと見られる。日本においても、『古今和歌集』に「春の日の光にあたる我なれどかしろの雪となるぞわびしき」(春上・八、文屋康秀)が見られ、右掲の白詩「早春」の影響下にあることが指摘されている<sup>1)</sup>。

ただ、右に挙げたような類型的表現は、自らの老いを率直に、あるいは自虐的に嘆く文脈を作るのが一般的である。それに対して、当該詩の「耄翁双鬢霜 春日不須消」は、「不須」を用いることによって、双鬢の霜が「必ずしも消える必要はない」、「消えなくてもいい」という意味になり、老いを嘆くのではなく、むしろ老いを肯定する表現となっているところが、伝統的表現とは異なっている。そして、

それに続く第三・四句「笑拈梅花坐 戲嬉似少年」は、「なぜなら笑って梅を拈って坐す私は、たわむれ遊ぶ少年のようなだから」というように、老いを嘆く必要がない理由が述べられる句として機能することになる。「耄翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年」という本文は、鬢の霜が春になっても消えないという老いを嘆く類型的表現を単純に踏襲するのではなく、逆説的に用いることで、笑って梅花を拈る自分の姿に少年を見て喜ぶ白髪の人<sup>2)</sup>の自己像を描いていると言える。

しかし、そのように解釈してみたとき、新たに二つの疑問点が生じることになる。

一点目は、詩題「歎老」とのずれである。鬢の「霜」は消えなくていい、春の日に梅と戯れる自らを少年のようにだ<sup>3)</sup>と言うこの白髪<sup>4)</sup>の老人は、どうも「老いを嘆いて」いるようには見えない。この老人の発言を、老いを実感するが故の強弁ととり、そこにむしろ悲壮感のようなものを看取する<sup>5)</sup>という見方もできるかもしれないが、しかし、本詩の場合、そのような屈折した「嘆き」を吐露する複雑な老人というよりも、自分に「少年」を見てはしゃぐ単純な老人の姿が浮かんでくるのである。

二点目は、第五句目「山水元無主」以降とのつながりの不自然さである。第五句目以降は、自然や死生が人間を超

越した制御不能なものであることを認識し（第五・六句）、粗末な着物の下に高尚な心を秘める生き方を求め（第七・八句）、己の生きるべき場は寒月が分け隔てなく照らし出す広大無辺の自然の中にあることを知る（第九・一〇句）というように解される。梅を拈る春日の自分は戯れ遊ぶ少年のようだと喜ぶ老人の姿（前半四句）と、広大無辺の自然の中で生死を達観する姿（後半六句）とが、すんなりと結びつかない。自らに少年の初々しい若さを見ようとする欲望と、生死を無限の自然とともにある制御不能なものとして見つめる達観とは、相容れない精神性であろう。

「耄翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年」の本文は、欠落句を想定する必要もなく、かつ漢詩文の類型的表現を踏まえながら、自らに少年を見て喜ぶ白髪の老人の世界が描かれた四句として、無理なく解することができる。しかし、その世界は詩題「歎老」にはそぐわない。また第五句「山水元無主」以降に描かれる老人の姿やその精神性との間にはかなりの隔たりがある。

#### 七、「伶俖須自怜」への改訂と第五句目以降の増補―寒山詩的世界の創出―

では、第二句目を異文「伶俖須自怜」に置き換えて、「耄翁双鬢霜 伶俖須自怜 笑拈梅花坐 戲嬉似少年」と

してみると、どうなるだろうか。

「伶俖須自怜」は、「耄翁双鬢霜」を受けて、老いぼれた我が身を独りあわれむ老人の心情を表すことになる。第二句に「春日不須消」を置く場合と異なり、孤独に生きていくしかない老いた己を嘆く老人の姿が浮かび上がってくる。そうすると、続く第三・四句「笑拈梅花坐 戲嬉似少年」は、自虐的な響きを帯びてくる。自らの老いを「伶俖」と言い、「怜」れむべきと言う老人は、笑って梅花を拈って坐す己に、戯れ遊ぶ少年を見るのだが、その視線には、老いを十分に自覚しながら、しかしそれ故に残ってしまう「少年」という若さへの未練が感じられる。この老人は、無邪気だった「少年」という時間が遠く過ぎ去り、もう戻ってこないことに孤独を感じているのだろう。

このような老いの孤独を抱える老人の世界は、詩題「歎老」とは矛盾しない。第二句を「春日不須消」から「伶俖須自怜」に置き換えると、前半四句では不可逆的な時間の中で、ひとり老いを抱えるしかないと嘆く孤独な老人の世界が描き出される。これはまさに「歎老」の世界である。

また、第五句「山水元無主」以降とのつながりの不自然さも、この置き換えによって解消されると思われる。第五句以降において、この老人は、人間の力では制御不能なも

のとして生死を捉え、同じく人知を遙かに超えた無限の山水とともにあらうと考えている。「老い」は、生を不可逆的で有限の時間の中における営みと捉えるから、嘆かれるのであり、孤独に感じられる。生を、循環する無限の時間が流れる「山水」とともにある営みと捉えれば、嘆きや孤独感を超越していくことができる。第五句以降で描かれているのは、その域にまで達した老人の精神性の高さではないだろうか。前半四句では、老いに孤独を感じ、嘆いていた老人が、第五句目以降の後半六句では、自らの生を有限の人間世界から無限の「山水」の中に解き放つことで、孤独感や嘆きを超越していくのである。

このように、第二句目を「伶俚須自怜」に置き換えると、詩題「歎老」のもと、逃れられない老いを嘆きながらも、生死を達観するに至る老人の世界が描かれた詩として解することができ。第二句目を「春日不須消」とする初めの本文が抱えていた、詩題との整合性の悪さと、第五句目以降とのつながりの悪さという二つの問題点が解消される。「伶俚須自怜」という異文は、初めに創作された四句を、「歎老」を主題とした漢詩に創り変えるべく、詩題「歎老」および第五句目以降の本文と同時に創作されたのではないだろうか。

創作者X氏は、はじめ、「羣翁双鬢霜 春日不須消 笑

拈梅花坐 戲嬉似少年」という四句を創作し、梅花を拈る自分に少年を見て喜ぶ白髪の老人を描いた（第一段階）。

しかし、少年時代は過ぎ去るものとして哀惜の対象となり、老いは避けられぬものとして悲嘆の対象となるのが詩賦の伝統的なあり方である。白髪の老人が梅を拈りながら、自分は少年のようだとはいやぐ世界というのは、詩賦の伝統から言えば一般的ではない。

X氏は、いったんは特殊な世界を描いたものの、一般的な漢詩として理解される作品に創り変えようと考え直したのではないだろうか。そこで、主題を漢詩の伝統にならつて「歎老」に据えた。まず、第二句目を「伶俚須自怜」に変えて、前半四句を老いと孤独を嘆く老人を造形するものに創り直した。この時、押韻も意識されたであろう。「春日不須消」の「消（下平四宵）」では押韻しないが、「伶（下平一先）」であれば第四句末の「年（下平一先）」と韻を踏むことができる。次に、第五句目以降を付け加え、生死を達観するに至る老人の精神世界を描いた。韻についても、「伶・年・天・纏・辺」で完全に押韻した。漢詩として完成させるなら、詩題も付さねばならない。「歎老」という詩題は白居易や陸游をはじめとして漢籍に散見されるこのようにして、X氏は、完成度の高い漢詩として通用させるために、主題を「歎老」に置き、押韻させ、詩題を付

し、第二句の異文と第五句以降を創作し、新たな作品に創り変えたのではないかと推量される（第二段階）。

それを図式化すると次のようになる。網掛けの部分が、X氏の創作の第二段階において、改訂・増補された箇所である。

（第一段階）

耆翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年

←

（第二段階）

歎老

耆翁双鬢霜 伶俖須自怜 笑拈梅花坐 戲嬉似少年

山水元無主 死生亦有天 心為錦綢美 身要布裘纏

城隍雖阻絕 寒月照無辺

このX氏が増補・改訂した箇所の詩句には、一つの共通性が顕著に見出される。寒山詩の表現との類似である。本詩と寒山詩の類似する詩句については、小島憲之氏がすでに指摘している。それらを改めて掲げると次のようになり、一見して右の網掛けした増補・改訂箇所の詩句に集中することに気づく。寒山詩の番号は、項楚『寒山詩注 附拾得詩注』（中華書局、二〇〇〇年）に拠る。

歎老詩

寒山詩

- |   |       |       |           |
|---|-------|-------|-----------|
| ① | 第二句異文 | 伶俖須自怜 | 220 隨緣須自怜 |
| ② | 第五・六句 | 山水元無主 | 224 死生元有命 |
|   |       | 死生亦有天 | 富貴本由天     |
| ③ | 第八句   | 身要布裘纏 | 221 身唯布裘纏 |
| ④ | 第九句   | 城隍雖阻絕 | 222 友朋雖阻絕 |
| ⑤ | 第一〇句  | 寒月照無辺 | 228 廓爾照無辺 |

287 高峰頂上 四顧極無辺

独坐無人知 孤月照寒泉

①の「自怜」は、『文選』所収の潘岳「寡婦賦」を初めとして漢籍に散見される表現である。しかし、「須」に接続する構成となると、なかなか他例を見出したい。②は、「死生」の対として、「歎老詩」では「山水」が置かれるのに対して、寒山詩では「富貴」が置かれる点が異なる。しかし、『論語』顔淵篇の「死生有命、富貴在天」を典故として「死生」と「富貴」の超越性を言う寒山詩の二句を応用して、人知に対する「山水」と「死生」の超越性を言う第五・六句が創られていることは明らかである。

③の「布裘」は21番詩以外にも寒山詩にしばしば現れる。162「蔬食養微軀 布裘遮幻質（蔬食もて微軀を養ひ 布裘もて幻質を遮る）」、197「布裘擁質隨縁過 豈羨人間巧模樣



（布裘の質を擁して縁に随ひて過ぐ 豈に人間の巧模様を羨まんや）、206「樺巾木屐沿流歩 布裘藜杖繞山廻（樺巾木屐もて流れに沿ひて歩く 布裘藜杖もて山を繞りて廻る）」、さらにこれらの詩を用いた寒山詩集序の「樺皮を冠、布裘疲弊、木屐履地（樺皮を冠と為し、布裘は疲弊し、木屐は地を履む）」、「貌悴形枯、布裘弊止（貌悴れ形枯れ、布裘は弊止す）」に見られるように、「布裘」は山水の中で生きる寒山の姿を象徴する語として機能している。「布裘」の語は、白詩をはじめとして唐代以降の詩賦に散見され、寒山詩にのみ用いられるわけではない。しかし、「布裘」が、強烈な個性を放つ伝説の人・寒山の生を象徴する語となっていることは注意される。そして、何よりも、21は「身：布裘纏」という句の構成そのものが一致しており、「歎老詩」が21詩に基づいていることは明らかである。

④は、「阻絶」自体は漢籍に散見される一般的な語であるが、「雖」と接続する構成そのものとなると、管見の限りでは他例を指摘し難い。「城隍」もまた詩賦に用いられる語であるが、寒山詩にも170「農家暫下山 入到城隍裏（農家暫し山を下りて 城隍の裏に入り到的）」、拾得詩にも54「遙望城隍処 惟聞鬧喧喧（遙かに城隍の処を望めば 惟だ聞くのみ鬧しくして喧喧たるを）」と見られ、寒山拾得が生きる清浄静謐な山水とは対照的な場を象徴する語と

して用いられている。

⑤の「無辺」も、漢籍に一般的に用いられる語だが、228では「照」と接続する構成が一致している。この228は、冒頭も「大海水無辺 魚龍万万千（大海の水は無辺にして 魚龍は万万千たり）」として無窮の自然を「無辺」の語で表している。287は「無辺」の一致だけでなく、「孤月照寒泉」と「寒月照無辺」の趣向が似ている。

第一句から第四句までにも「鬢」の「霜」、「春日」、「少年」など、寒山詩と一致する表現はあるが、それらは詩賦に用いられる語として一般性あるものが一致しているに過ぎず、寒山詩に拠らなくとも可能な表現である。それに対して、第二句異文と第五句目以降に集中するこれらの箇所は、一つ一つの語は他の詩賦に用いられるものであっても、それらの語を用いた句の構成や趣向そのものに明らかに寒山詩との共通性が見出される。第二段階の創作時に至って、寒山詩がかなり意識されたことが推測される。

寒山詩については、『參天台五臺山記』卷一「熙寧五年五月二二日」に、入宋僧成尋（一〇一一—一〇八一）によって日本にもたらされたことが記され、一二世紀の通憲入道（一一〇六—一一五九）の藏書目録に寒山子詩の記載があると言う<sup>16</sup>。五山僧の詩に寒山詩の受容と影響が確認され、江戸初期には隠元『擬寒山詩』（寛文六年刊）に見られる

ような寒山詩に擬した漢詩が創作されたり、釈虎円『首書寒山詩』（寛文一二年刊）、連山交易『寒山子詩集管解』（寛文一二年刊）などの注釈書が刊行されたりしている。

鄭文全氏は、江戸寛文年間の寒山詩をめぐる状況を、五山文学の「余韻を受け継」いだ「日本の仏教界」における「ブーム」としている。X氏が増補・改訂にあたり、寒山詩的な表現を取り入れた背景には、江戸初期における寒山詩の流行があったのではないかと考えられる。

## 八、おわりに―「笑拈梅花坐」成立の謎―

亡名氏「歎老詩」は、明らかに懷風藻時代の作品ではない。小島氏は大系解説において、「懷風藻のものと詩か甚だ疑わしい」と述べ、「寒山詩の一愛読者であった後人某の作の混入（或は付加）」である可能性を指摘しながらも、後年になり、それを撤回する発言をしている。<sup>(18)</sup>しかし、当該詩は、懷風藻諸本の状況、「白雲書庫本懷風藻」の本文の性格などから見て、明らかに後人による付加であり、その時期は近世期初め、天和四年以降元禄一七年の間の可能性が高い。

創作過程は、第一段階と第二段階に分かれる。第一段階で創作した、笑って梅を拈る自分を「少年」のようだと喜ぶ特異な老人の世界は、第二段階において寒山詩を意識し

た増補改訂が施され、老いた自分を「少年」のようだと自己虐的に嘆く老人が、自らを广大無辺の山水に解き放ち、生死を達観するに至る寒山詩的歎老の世界へと創り変えられた。この寒山詩への志向は、江戸初期における寒山詩流行を背景としている可能性が考えられる。

では、第一段階の四句「耄翁双鬢霜 春日不須消 笑拈梅花坐 戲嬉似少年」が創作された背景には何があるのだろうか。山岸徳平氏が、「笑拈梅花坐」の句は、禪宗の公案「拈華微笑」に基づいて創作されたものであることを論じている。「拈華微笑」は、釈尊の「拈華」の行為を見て「破顔微笑」した摩訶迦葉にのみ、釈尊の教えが伝えられたとする公案である。禪宗において、文字や言葉に拠ることなく、以心伝心で釈尊の教えを会得するという禪宗の伝法を説明するものとして重視される。この公案は、続藏經八七卷印度撰述部収載『大梵天王問仏決疑經』に載る。この經典は偽經として知られ、既存の公案に基づいて偽作されたと言われる。<sup>(20)</sup>『決疑經』がいつ偽作されたのかはにわかに判断し難いが、「拈華微笑」の公案そのものの成立は、おおよそ北宋ごろと見られている。多くの禪宗関係の語録や抄物に現れることから考えると、禪宗の世界ではかなり広く浸透していたと思われる。不立文字を掲げる禪宗において、「拈華微笑」は中心的思想として位置づけられている。

たことが想像される。

第一段階で創作された第三句「笑拈梅花坐」は、この「拈華微笑」の公案にとつて重要な仕草を表す「拈」「笑」の語、かつ禪宗で中心的所作となる「坐」という語も用いており、山岸氏の言うように、「拈華微笑」とかなり深い関わりを持つて成立したことが推察される。

しかし、当該句と「拈華微笑」の間には無視できない違いもある。「拈華微笑」で「拈」じられるのが「蓮華」であるのに対して、当該句では「梅花」という点である。

そして、公案では「拈」の主体は釈迦であり、「笑」の主体は摩訶迦葉で異なるのに対して、当該句では「拈」も「笑」も主体はともに、自らに「少年」を見て喜ぶ「耆翁」だという点である。本句は「拈華微笑」と深い関係にあるのは確かだが、それだけでは本句の成立には至らないのではないだろうか。本句の成立には、禪宗の悟道を表すものとして受け継がれた詩偈の一節「帰来笑拈梅花嗅」が関与しているのではないかと思われるが、この点を含めて、当該詩の第一段階創作の事情については、稿を改めて論じたい。

## 注

- (1) 懷風藻伝本および本文については、拙稿「懷風藻」伝本および本文の諸問題」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』

四四号、平成二六年三月) 参照。

- (2) 吉田幸一「懷風藻に於ける亡名氏とその詩『歎老』一首に就いて」(『歴史と国文学』一〇巻一号、昭和九年一月)、山岸徳平氏「拈華微笑」と『笑拈梅花』(『山岸徳平著作集Ⅰ 日本文学研究』有精堂、昭和四十七年)、小島憲之「日本文学大系69 懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹」(岩波書店、昭和三十九年)「解説」など。

- (3) 前掲注(2)小島大系「解説」。

- (4) 群書類従懷風藻本文の性格については、前掲(1)論文をはじめとした一連の拙稿において論じてきた。

- (5) 足立尚計「懷風藻の諸本」(『皇學館史学』創刊号、昭和六一年三月)。

- (6) 林家における懷風藻書写活動については、拙稿「『本朝一人一首』と『懷風藻』—林家における『懷風藻』継承—」(『古代研究』四七号、平成二六年二月)、「『本朝編年録』『本朝通鑑』と『懷風藻』」(『古代中世文学論考』三〇集、平成二六年一〇月)、「『本朝三十六詩仙』について」(『早稲田大学日本古典籍研究所年報』一二号、平成三一年三月) 参照。

- (7) 懷風藻本文をめぐる考証学家的考証のありようについては、拙著『静嘉堂文庫蔵『懷風藻』本文と研究』(汲古書院、平成三〇年)の「第三章 鈴木真年の知的環境」第六章「懷風藻箋註」本文の性格」参照。

- (8) 「白雲書庫本懷風藻」については、拙稿「白雲書庫本懷風藻」の本文と性格」(『古代中世文学論考』三三集、新典社、平成二八年八月)で論じたことがある。

- (9) 野間三竹と懷風藻については、拙稿「『本朝詩英』懷風藻

本文の性格―『一人一首』の継承と鍋島本系統本文に基づく改変―」（『古代研究』四九号、平成二八年二月）参照。

(10) 前掲注(2) 山岸氏論文。

(11) 前掲注(7) 拙著参照。

(12) 前掲注(2) 吉田氏論文。

(13) 岡田正之『近江奈良朝の漢文学』（養徳社、昭和二十二年）、二〇九頁。

(14) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』（芸林舎、昭和三〇年、一二〇頁。尚『懷風藻箋註』が、「春日不須消」に対して、「雪は日に逢へば則ち消ゆ。如何せん、余の髪は白きは春日を以て照らせど消えざるを言ふなり」と注し、この類型的表現に基づく解釈を示している。

(15) 前掲注(2) 小島大系「解説」。

(16) 木東波「論寒山詩日本古注本の学術価値と文化意義」（『寒山詩日本古注本叢刊』鳳凰出版社、二〇一七年）。

(17) 鄭文全「寒山詩と江戸文人たち」（『中国文学論集』四〇号、平成二三年一二月）。

(18) 小島憲之『漢語逍遙』（岩波書店、平成一〇年）、二一〇～二二二頁。

(19) 前掲注(2) 山岸氏論文。

(20) 忽滑谷快天『大梵天王問仏決疑經について』（『禅学批判論』鴻盟社、明治三八年）、石井修道『大梵天王問仏決疑經』をめぐって」（『駒澤大學佛教學部論集』三一号、平成二二年一〇月）、「拈華微笑の話の成立をめぐって」（『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教学と仏教諸思想』春秋社、平成二二年）、前掲注(2) 山岸氏論文参照。山岸氏が、『決疑經』は「北宋の禅僧」による偽作とし、その渡来以降に「拈華微笑」の語が流布したと対して、石井氏は公案そのものは禅宗の燈史『景德伝燈録』（一〇〇四）から『天聖広燈録』（二〇三六）の間に成立し、禅者の間で伝承されていたが、「拈華微笑」の權威化を図って『決疑經』が江戸時代日本で偽撰されたと論じる。經典の成立とするか公案の成立とするかの違いはあるが、「拈華微笑」の成立を北宋とする点では両氏の見立てはほぼ一致していると言える。

笑」の語が流布したと対して、石井氏は公案そのものは禅宗の燈史『景德伝燈録』（一〇〇四）から『天聖広燈録』（二〇三六）の間に成立し、禅者の間で伝承されていたが、「拈華微笑」の權威化を図って『決疑經』が江戸時代日本で偽撰されたと論じる。經典の成立とするか公案の成立とするかの違いはあるが、「拈華微笑」の成立を北宋とする点では両氏の見立てはほぼ一致していると言える。

(21) なお、寒山詩32「少年何所愁 愁見鬢毛白 白更何所愁 愁見日逼迫 移向東岱居 配守北邙宅 何忍出此言 此言傷老客（少年よ何の愁ふる所ぞ 鬢毛の白きを見るを愁ふ 白きは更に何の愁ふる所ぞ 日の逼迫せるを見るを愁ふ 東岱の居に移向せられ 北邙の宅に配守せらる 何ぞ此の言を出だすに忍びんや 此の言老客を傷ましむ）」も、この「歎老詩」の成立を考える上で気になる詩である。X氏が、「鬢」の「白」い自分に「少年」を見て喜ぶ老人（第一段階）から、「少年」の日を我が身には二度と戻ってこないものと見て嘆く老人（第二段階）へと造形し直す契機として、示唆を与えたのではないかと思われるが、「少年」という語の持つイメージは「拈華微笑」「梅花」などと深く関わりと考えられ、稿を改めて論じてみたい。

#### 附記

本稿は、令和元年八月三一日開催の懷風藻研究会（代表・高松寿夫）における発表をもとにしている。また、科研費基盤研究C「勅撰三集を中心とした日本漢詩文の文献学的研究」（一九K〇〇三四二）および「懷風藻の注解に基づく上代日本の文筆活動の研究」（一九K〇〇三三一）の助成を受けて行った研究の成果の一部である。